

# 蒲団

## 映画文学人生論

原作：田山花袋（1906）「新小説」

参考：『蒲団 恋する日曜日 文学の唄』（2006）

監督：若松孝二

脚本：加藤君平

出演：横山芳子 黒木メイサ

撮影：近江正彦

竹中時雄 佐野史郎

音楽：遠藤淳二

竹中恵美 石川真希

三十六にもなつて。子供も三人あつて

あんなことを考えたかと思うと

田山花袋『蒲団』は日本自然主義文学の代表作で、日本的私小説の出発点に位置する作品と目されている。

主人公の小説家は三十六歳の既婚者で、三人の子供の父親。というと、作者その人を思わせる。作者と重なる人物を主人公にして、ありのままを露骨に描写するのが日本的私小説の手口らしい、小説家竹中時雄に作家志望の美しい女性が弟子入りをして、住みこむ。小説家は嫁入り前の娘の保護者としての役割を期待されているのに、内心では自分の愛欲の対象として意識していた。

ところが、彼女はいつのまにか某学生と恋愛して、去ってしまう。主人公は彼女が残していった蒲団に顔を埋め、匂いをかいで涙にくれる。男はつらいよ。

小説家竹中時雄はフーテンの寅さんのような独身中年男ではないが、馬鹿という点では、寅さんと似たようなものだ。「三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考えたかと思うと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか」。

このような馬鹿の煩惱の露骨なる描写が自然主義文学の特徴だ。「小説の首脳は人情なり」「人情とはいかなるものをいふや。日く、人情とは人間の情欲にて、所謂百八煩惱是れなり」という坪



## 蒲団

映画文学人生論

内逍遙『小説神髓』の主張にもか なっている。  
一般読者に歓迎されたかどうかは疑問だが、少なくとも明治四十年代の狭い文壇の中では評判になった。聖人君子をめざしているはずの文学者が偽善的な体面をかなぐり捨てて、正直な人間らしい真実の告白をした画期的作品として受け入れられたのである。

しかし、聖人君子の仮面を剥ぎ、百人煩惱の露骨なる描写を強調する自然主義的私小説の流行が夏目漱石のいう内発的開化なのだろうか。

『蒲団』は、平成十八年に若松孝二監督によってテレビドラマ化された。『恋する日曜日』「文学の唄シリーズ」のうちの一本だ。

原稿の売り込みに苦労している小説家の家に故郷から弟子入り志願の若い女性が上京してくる。小説家は若い頃、夏目漱石の文体で文章修行をしたものだと思得意げに女弟子に語るが、漱石は自然主義の作家ではない。花袋にとって、漱石は逆に目の仇のような存在だった。花袋が漱石の文体を模倣するはずがない。

つまり、ドラマは原作のパロディであり、主として明治時代の昔と平成時代の現在との風俗習慣のズレを利用することによる笑いを狙った軽喜劇（ライト・コメディ）となっている。その手法は自然主義の手法ではない。

夢の世の聖人君子蒲団干す